

ワイドアングル

第11回

ドキュメンタリー映画
『ゆうやけ子どもクラブ!』を語る

映画監督 井手 洋子

映画に描かれたゆうやけ子どもクラブは、東京の小平市で1978年に発足した、現在全国に1万3千か所以上ある放課後デイサービス事業所の草分け的な存在である。障害のある子どもの居場所づくりに40年以上奮闘してきており、遊びや生活を通して子どもの発達を促していくという活動を設立以来変わらぬ姿勢で貫いてきた。

映画は、こうしたゆうやけ子どもクラブの長年の成果をベースにした日常活動に焦点を当てている。

■ 1 映画制作の始まり

2017年の春に、知人を介して、東京の小平にあるゆうやけ子どもクラブから連絡をもらいました。翌年(2018年)にクラブの40周年を記念してコンサートを開くので、そこで活動の紹介をするビデオをつくりたいとのこと。

その時、ゆうやけ子どもクラブが、障害児の放課後をみる団体だと聞いて、えっ?と思いました。知らなかったんです。一般の学童は知っていても、障害のある子の放課後の居場所があることを。考えれば、障害のある子どもにも当然放課後の生活がありますよね。当たり前のことなのに想像したことがなかった。だからどんなところだろ

いでしょう

1984年より映像制作の仕事始める。羽田澄子監督の『安心して老いるために』『歌舞伎役者・片岡仁左衛門』などに助監督として参加後、フリーランスのディレクターとなる。代表作に布川事件を追いかけた『ショージとタカオ』(2010年、自主映画作品)など。

障害者の発達と権利を保障する研究運動が地歩を固めいっそう前進するために、さまざまな科学研究の成果や社会諸分野の実践・運動に学ぶコーナーです。

うとものすごい興味がわいたんですね。それがきっかけでした。

当初ゆうやけ子どもクラブの方では、ビデオについて、卒業生の男の子で歌が大好きな子のエピソードを、再現も交えて一つの成長の記録みたいにしたいという企画を立てていました。素敵なエピソードでしたが、それは過去の話なので、私は、せっかくカメラを回すのであれば、今現在ゆうやけ子どもクラブに通っている子どもたちにカメラを向けて、自分の目で何かを発見したいと思いました。子どもたちの成長を目に見えるかたちで記録するのはコンサートまでの短い期間では無理でしょうから、なにか成長の兆しみたいものがすくいとればいいのか、過去のことを映像化するよりも、撮影しに行つて発見したことを記録していった、できれば1時間くらいの映画にしたらいいいのではないかと提案をしたのです。

それでゆうやけ子どもクラブの方から父母や市民に呼びかけて寄付金を集めてくださったんですね。そういう流れでこの映画がつくれることになりました。

■ 2 何を撮ればいいのか…

ドキュメンタリーは、誰か一人に焦点をあててその人を追いかけるというのが手法としてはやりやすいし、こちらも視点が定まってくるのです。けれどもゆうやけ子どもクラブの紹介ビデオをつくりたいというところから始まっているので、事

業所は第1から第3まで3事業所あるのですけれど、とにかく3つ全部撮ってほしいと、これにはちょっと困りました。誰か一人主人公をつくるというわけにはいかなかったのです。

それで、成長の兆しが見えそうな子どもを一事業所で2~3人ずつ紹介してください、という話をして、何人か挙げてもらいました。けれど撮影に行くと事業所ごとに子どもが20人ぐらいいて、遊んだり駆け回ったり、笑ってたり泣いてたりとか、お外に行くとか、もうごちゃごちゃなんで、紹介して下さった子どもを中心に撮ろうとするのですが何をどう撮っていいのかわからない。毎日見ていれば、少しずつ変化があるとか、この子はこうだとかわかってくるけれど、たまにしか撮影に行けない。子どもたちは、思わぬ行動に出たりする。ずっと追いかけても何がどうなるのかわからない。撮影が終わって帰ってくるとガクツとなる。映画にしましようと言ったものの、私これ、まとめられるのかと、撮影当初、どうすればいいのか悩みました。

放課後活動ってどんなものかも、何もわからないまま、2回目か3回目に午前中から撮影に行つたとき、職員が子どものことをああじゃないかこうじゃないかと話していました。

毎日一人ひとりの子どもについて指導員がきょうはこういうことがありましたって、保護者への報告を書いているのですが、それがものすごい量ストックされているんですね。撮影のときはある子の記録を輪読していました。

ずっと撮っていると、職員が「あ、ここにも同じ事実があった」とか言いながら、過去の記録から事実、つまりその時々起こったことやその子の気持ちの揺れを見つけていくんですね。これはドキュメンタリーといっしょだなと思ったんです。ドキュメンタリーの映像は、具体的な出来事のディテールを積み重ねていくことが非常に大事だと思っているので、撮影している途中からもうわくわくしてきて、これはぜひ映画で紹介したいと思いました。

ゆうやけ子どもクラブの活動の中には、話し合



映画『ゆうやけ子どもクラブ!』

監督・製作：井手洋子／撮影：中井正義・井手洋子／編集：大川景子／整音：遠藤春雄／音楽：芳賀一之／題字：永野徹子／企画：「ゆうやけ子どもクラブ!」上映実行委員会／製作：井手商店映画部／配給：井手商店映画部・ピカフィルム／2019年／日本／カラー／DCP／112分

いや研修会もいろいろあるんですが、あるとき井原さんという指導員さんが、ガクくんという子のことを話していました。自分の気持ちを相手に伝えることがなかなかできず、気持ちが不安定で、おんぶや抱っこを要求してくる。気に入らないことがあると相手を噛んだり、対応に苦慮すること多かったですけれど、あるときほんのちょっとしたことでガク君と気持ちを交わす瞬間があったというのです。たくさん子どもがいるので、ガクくんってどの子かわからないんですけども、いちど撮影をしてみたいとそのときに思ったんです。

夏休みに何日か集中的に撮影に行つたときのこと。ある朝ガク君が泣いていて、その日は終日ガクくんがカメラを向けました。夕方、ガク君は指導員の井原さんと散歩に行つたのですけれど、そこについていきました。ガク君はその時小学校の5年生。普通はおんぶはしないのですが、ガク君のいろいろな状況を考えて指導員たちは彼の要求を受け入れていました。この日、散歩の大半がおんぶの状態だったんですが、私と撮影の中井さんは、その様子をずっとカメラを回しながら同行したんです。夕方だったんですけど夏の暑いさかりで、私はガク君の行動を観察するどころか、ついていくのが精一杯。最後まで撮影を続けてく